

ESSAY

社会学者
橋爪大三郎



晴れ、のち雨、のち……??

●はしづめ だいさぶろう

1948年神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒、同大学院修了。そのあと研究・執筆に専念。1989年より東京工業大学工学部助教授(社会学)。著書に、「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「現代思想はいま何を考えればいいのか」(以上、勁草書房)、「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)、「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)。共著に「小室直樹の学問と思想」(弓立社)など。

経歴から見ると、私なんか順調そのものだろう。父親が受けろと言うので、わけもわからず、小学6年の夏から半年勉強して開成中学を受験した。合格した。社会学をやりたいと、東京大学の文科三類を受けた。合格した。大学院のときは一回すべったが、翌年合格した。ちゃんと準備すれば、試験は合格できる。それが私の教訓だった。

でも順調だったのは、このあたりまで。そのあとは、何回やっても不合格の連続。大学受験なら、三浪、四浪は誰だって願ひ下げだが、私は就職試験に、十二年も失敗し続けたのである。

社会学の大学院(修士課程2年、博士課程3年の5年間)を修了すると、あちこちの大学の助手や講師の募集があるたびに、応募し続けた。毎年数箇所に応募するはしから、「残念ながら、貴意に添いかねます」という不合格の通知が、たまっていく。東京六大学はもとより、関東一円、関西の大学にいたるまで、めばしい大学の返事が分厚い束になっているのが私の自慢だ。

どうして落ち続けたのか、よくわからない。自分では人一倍仕事をしてたつもりだが、それをあっさり他人が認めてくれるほど、世の中は甘くないということなのだろう。

私にとってよかったのは、そうしている間にも、思う存分研究に打ち込めたこと。金はあまりなくても時間ならたっぷりある。長めの論文が月に一本は書ける。その気になれば、誰だって年間一千枚くらい原稿を書けるものなのだ。そして、そのころ考えたことが、そのあとあちこちに発表した文章のもとになった。

そんなに長い間無所属で大変だったでしょうねえ、などと言うひとがときどきいる。そんなことはなかった。時間が勝手に過ぎていくだけ。私はいつも、つぎは何を書こうかを思案していた。3ヶ月先のことまでしか考えない——それが私の流儀だった。

人間には現在しかないし、明日のことは判らない。それなら、あとから振り返って悔いのないよう、今を過ごすしかないと思うのである。

— 1 —

目次

なぜ私は英語が話せないのか

特集 先生のビタミン剤

旅立たずにはいられない/AFSボランティアとして/創造する

楽しみ——英語を書きまかせ/同時通訳挑戦未記/文通相

手は30人/研修会比較考/大学院で猛勉強/落語の効用/教

師から生徒へ変わる瞬間/TOEICで知った私の「健康状態」/

手軽になったパソコン通信/子どもに魅せられて/マオリ

文化に触れた夏/フランス的思考法が刺激に/イギリス・ロマン

派名詩鑑賞

「フェアリー」と「fair」の間

12

語訳

RACCOON WINDMILL

なぜ私は英語が話せないのか

橋爪大三郎

中学、高校と6年間も習ったのに、さっぱり英語が喋れない。外国語は難しいものだ。外国語だから喋れなくて当たり前。——それが私の実感だった。

ところが5年前、ひょんなことから中国語を習い始めてみると、どうも様子が違う。よちよち歩きながら、どうにか喋れるではないか。なんとか通じるではないか。そこで気をよくして習い続け、いまでは英語よりだいぶまし、と言える程度になった。

理由はなんだろう、と考えてみる。

まず第一に、漢字の存在が大きい。中国語は一字一音が原則なため、漢字をそのまま音読すれば意味が通じる。そしてありがたいことに、日本語と共通する語彙が多いのだ。日本人は漢字の熟語を沢山知っているから、初学者が上級のテキストを見てもだいたい意味がわかる。これは励みになる。

第二に、もっと大きいのはネイティブの先生に習ったこと。バリバリの北京語を話す中国人の老師(ラオシー)は、日本語がほとんどできない。こちらが中国語を喋らなければ、授業そのものが成り立たない。まず喋って、それから読む。この順序がよかった。

要するに私は、外国語だからでなく、英語だから話せなかったのだ。英語の教わり方が悪かった後遺症で、話せないのである。だいたい自分も英語が喋れない日本人に習って、喋れるようになるわけがない。なんとも奇妙な英語の学習法を、日本人は続けているものだ。自国語でない言語を教えるのは、そもそも無理なことなのである。

英米から遠く離れ、日本人だけが住む島国で、わが国は独特の「英語教育」の伝統を培ってきた。テレビもビデオもない昔なら、それも仕方がなかった。英語は受験の役に立てばそれでよかった。しかしこれから先、そんな伝統を守る必要があるだろうか。

話を逆にしてみると、それがどんなに奇妙なことかわかる。ヨーロッパの沖合に島国があって、数十万人の教師が日本語を教えている。けれども、生徒たちも教師たちも、まともな日本語が喋れないのである。……。もしもこういう国があったら、日本人がまず考えるのは、その国に日本人の教師を派遣しようということだろう。それが無理だとしたら、その国のカリキュラムか教え方に問題がありそうだから、よさそうなテープや教材を送ってあげようということだろう。——海の向こうから日本の英語教育を見ても、やはりそう映って当然ではないか。

日本中の教壇に、ネイティブの英語教師を立たせるのは無理かもしれない。だったらなおのこと、それを少しでも埋め合わせなければならない。たとえばパソコンのウィンドウズなどを使って、発音や自然な言い回しを自習できるソフトを開発する。生徒よりも、まず教師の会話能力を鍛える。21世紀の日本人の英語能力を高めるには、そのあたりから本気でとりかかるべきであろう。

瀬尾育生・せおいくお

1948年・名古屋に生まれる。

1973年・東京大学文学部独文科卒業

1973-1986年・同人誌『夜行列車』に参加

1976年・詩集『水銀灯群落』

1981年・『鮎川信夫論』思潮社

詩集『吹き荒れる網』弓立社

1981-1987年・同人誌『菊屋』に参加

1984年・詩集『らん・らん・らん』弓立社

1988年・評論集『文字所有者たち』思潮社

詩集『ハイリリー・ハイロー』風琳堂

1991年・評論集『われわれ自身である寓意』

思潮社

1993-11-2/5

瀬尾育生

Seo Ikuo 詩集



カゲロウの弱さをもつタランチュラ。あなたの眼を広場に向けておきなさい。国教会の鐘の音が聴こえたら駆けだすのだ。それがあなたに起こるかも知れないから。きょうも一日わたしは途方にくれていた。どんな仕組みできみの手は動くのかしら。どんな装置できみの髪はのびるのかしら。どんなふういきみの眼は。

瀬尾育生さんのこと

橋爪大三郎

瀬尾育生さんと私は、大学一、二年が同級で、以来だらだと長い付き合いである。最近、同じ場所に文章を寄せていたのが本書編集担当者の目にとまり、友人のよしみで「詩人論」を書く羽目になった。

現代詩は最近ちつとも読んでいないし、関心もない。私はそう言ったのだが、「詩のことは、別にちゃんと書く人がいますからね。学生時代のこととか、瀬尾さんの素顔なんかを、紹介してくれればいいんです」という返事。そういうものかと思って引き受ける。

* 瀬尾さんが、現代詩文庫にラインアップされると聞いて、今昔の感にたえない。

大昔にながめていた現代詩文庫、特に番号のかなり若い何十冊かは、そうそうたる詩人たちばかりで、雲の上を見上げるような感じだった。彼らの書いているのが現

代詩で、年端もいかなない同級生の書いているものはそれとまるで違った別物と考えていた。預言者は故郷に容れられない、ということなのだろう。でもとにかく、瀬尾さんの作った詩を、ウン、コレハ傑作だと感心した覚えがないのである。

東大の駒場（教養学部）では、第二外国語ごとにクラスに分かれる。文科三類には文学志望の連中が集まっており、瀬尾さんと私のいたLⅢ5B（ドイツ語未修）組にも大勢いた。間もなく彼らは、文芸誌のようなものをガリ版刷りで作りはじめ、百円かそこらで手売りして回る。ごたぶんにもれず三号雑誌で、出来てはつづれを繰り返したが、卒業まで途切れることはなかった。

瀬尾さんは、その頃から熱心な詩の書き手で、たいいてい雑誌にからんでいた。誰でも最初にびっくりするのは、彼のガリ切りの圧倒的なうまさである。瀬尾さんの詩集『水銀灯群落』（一九七五）は、手書き原稿をそのまま写真整版したもので、その腕前がひと目でわかる。丸っこい文字で、なぜか変体少女文字によく似ている。タテ看を画く場合にも当然、彼の技術は重宝した。

彼ははにかみ屋で、内気な反面、人なつこい性格である。そんな彼を、級友たちは、典型的な一人っ子と揶揄した。一人っ子は、まだ少数派だったのである。たしかにそう言われるとなんとなく納得してしまう雰囲気がある。彼にはある。ずっと丹念に日記をつけているなどというところも、いかにも彼らしい。髪の毛の生え際のところ、ゴルバチョフ氏の三分の一位の小さな赤い痣がある。本人は一応気にしていたらしく、入学式の写真で見ると、頭髪を額にかぶせて髪型を工夫している。そんな点からも、いやでも自意識過剰に育ってしまったのかもしれない。

*
東大闘争が終わって、いろいろなことがあったが、瀬尾さんと私は半年遅れで本郷の文学部に進学した。瀬尾さんは独文科、私は社会学科と所属こそ別々だったが、毎日のように会って議論していた。構内にあったアートコーヒーという喫茶店が溜まり場ようになっていて、そこに行けば必ずクラスの誰かがいた。

瀬尾さんの適度な論理性と適度な柔軟さと適度な潔癖

*
私の学生時代はベトナム戦争の最中で、王子野戦病院粉砕だの空母エンタープライズ寄港粉砕だの、七十年安保をひかえ世情は騒然としていた。私たちのクラスでも運動組織を作ろうと、雑誌を出していた連中あたりが言い出し、「530委員会」が組織された。5月30日に学生ストライキをしようという他愛もない組織のようだったが、私はその頃から講義をサボって教室に出ていなかったから、詳しい事情はよく知らない。瀬尾さんがこの組織に名を連ねていたことは、言うまでもない。

5月30日のストは空振りだったが、6月16日に本郷の安田講堂に機動隊が入り、いわゆる「東大闘争」が始まった。キャンパスは突然、フランス革命みたいなことになってしまった。瀬尾さんも私も、クラスの代議員だったので、駒場の九百番数室で徹夜の代議員大会を何回も付き合い、全共闘ができればそれに加わって、一年近くあいだ、石を投げたり棒を振り回したりの日々を送った。瀬尾さんとは気がつけば一緒にいることが多く、彼の人柄を少しずつ知るようになった。

さは、議論の相手としてちょうどよかった。そこで気が合って、きっかけは忘れたが、読書会を始めることにした。二人とも大学院を受験するのに、ドイツ語が必要だったからかもしれない。ヘーゲルの『エンチクロペディ』を一年間、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』を一年間、それぞれ舐めるように読んだ。

宗教学の柳川啓一さんの講義と一緒に受け、そこから刺激を受けたためか、ある日彼が「宗教性試論」という30枚ほどの論文を持ってきた。吉本隆明とフロイトとヘーゲルと一緒にしたような構成で、私はとても触発され、卒論にも利用させてもらった。ほかに彼と一緒に受けた講義では、独文の生野幸吉さんの、ベンヤミン『ベルリンの幼年時代』の輪読が印象に残っている。

本郷に移ってから、彼はせっせとものを書き続け、やはりガリ版刷りで、同人誌や個人誌を数ヶ月に一度のペースで出していた。同人誌のなかでは『どうぶる・ヘー（明るい地獄）』というのが、いちばん長続きしていたようだ。

彼は自信があるくせに、私の意見を聞きたがり、私が

無理やり難辭をつけると、顔をしかめながらも、それをよしとしているふうであった。他人が彼の書いたものを一生懸命読めば、それで満足だったのかもしれない。

* 東大闘争のすったもんだをくぐっているの、大学のクラスメートといっても、どこか運命共同体のような雰囲気があった。

私はつきあいが悪いので、あまり飲みにも行かないし、クラスメートの集まりなどにもめったに出ないが、瀬尾さん^はそこまで非常識ではない。でもどこか、飲み騒ぐ仲間たちのなかで冷静でありつづける部分を持っている（のではないか）と思う。

そういう予備知識があると、「築地辞職者忘年会」などは舞台裏がわかっておかしい。これはほとんど、実際の様子そのままである。友人たちの個人的な事情を勝手に「詩」にしてしまって、こんなのが「作品」かと思うが、たしかに正確に描けてはいる。たぶん身近かな何ものかを自分から切り離してはつきりさせるという必要から、瀬尾さんの仕事はできあがっているみたいだ。

くは資質のようなものを感じさせる。本人を知っていると、なるほどと思ってしまう。

まず、なま温かなしめり気を感じる。彼の生理が受けつけないような言葉は注意ぶかく排除されているのだから。加えて、相当にしつこい。ものにこだわる性質なのだ。よく言えば、理屈っぽく論理的なのだが、その論理は堅固で明快な構築物を形づくることはなく、ぐるぐると小さな半径を描きながら、どこともない方向へ展開して行ってしまうような当惑を、読者に感じさせる。少なくともそう見せかけるのが、彼の戦略である。正体を見せたがっているくせに、正体を隠したがついているという逆説がいつもつきまとって、貝殻を被った軟体動物のようである。

私はこういう彼の詩を、彼らしいと思うが、あまり好きではない。世の中に、彼の詩を感心して読むひとがいるとは信じられない。しかし、彼は自分の詩が優れていることに、万全の自信を持っているようで、したがって、彼の詩について話すときだいたい最後はもの分かれになってしまふ。

瀬尾さんは、はじめ評論のようなものはあまり書かず、年中詩を書いてきた。そして詩人になったがっていた。

私は、詩人になりたい（詩を書きたい、ではない）と公言する人間をほかに知らないの、そのこと自体驚きだが、それが本当に詩人になってしまったのだから、ますます驚いている。たぶん彼にとっては、詩を書くことなど、息をするのと同じくらい当たり前で、そのうえで自分の存在を認められたいということだったのだろう。

ただし、詩人になっても喰えない。そういうこともちやっかりいろいろ考えたに違いなく、彼はドイツ語教師の道を選んだ。（ドイツ文学と言いたいところだが、アイデンティティは圧倒的に日本文学にあるようだ。）宗教学や比較文学にも魅力を感じたらしいが、結局独文の大学院に進み、郷里の名古屋に大学教員の口をみつける。奥さんも詩人からみついたり、どうも彼は全体として、完結してどこかへぬくぬくと自閉してしまおうという生来の嗜好でもって、半ばぐらい動いているのではないかと思う。

ところで彼の詩は、どの行を読んでも彼の生理、もし

彼は詩を書くということ、なかば以上技術の問題だと思っっているようである。「喩が高度化する」などというロジックを使い、自分の技術が高度であることを自負している。私に言わせればそれは、たとえば「タフロータリーにさしかかると」と素直に言えばよいのに、それを生来の性癖から「車輪がとり囲んでいる円陣のなかでゆうぐれの道がちぢれるように湾曲する」と言い換えなければ気がすまないというだけのことであり、そのために何時間かけて鉛筆で書いたり消したりしたということにすぎないのだ。

このあたりのことに関して、私と瀬尾さんの間には、何回話しても基本的な見解の相違がある。彼はこの点（当然のことだが）頑固で、時として権力的ですらある。（思いついたのでついでに言えば、彼は絶対認めないと思うが、おそらく彼自身がスターリニストなのだ。「スターリニスト」というのは、彼の口にする最高の悪態である。たぶんそれは自己嫌悪に由来している。）

* こういう具合で、彼が詩を書く権利は認めるものの、

私にはそれが世間に認められるなどということがあってよいとは思われない。しかし、現にもう認められてしまっているらしい以上、これは、私が詩というものをまったく解っていないか、あるいは世間が間違っているかのどちらかなのだ。

彼の詩風も、年齢を重ねるに従って少しずつ変化（進歩？）したようだが、私にはよくわからない。名古屋で『菊屋』という詩誌にタッチしたあたりから、ふっ切れた軽快なフットワークもこなせるようになったようだ。ただし元々が、ねばねばとした繊細な感受性を蠟で固めたような作風なので、いくら軽快に見えても限度がある。という辺りに行き詰まりを感じたせいだか知らないが、いつの間にか、瀬尾さんは詩論や評論なども多く手がけるようになり始め、仕事の幅を拡げている。詩は評価しないが、評論には感心したと言っている文学者もいた。

ところでその評論がどの程度すぐれているのか、私には皆目見当がつかない。そのことを判断するには、評論の対象となっている詩人や作品について、最低限の知識がなければならぬが、私にはその知識がない。したが

って、彼が何を論じているのか、さっぱりわからない。詩よりも評論のほうが、私のやっている社会学という学問に近いと思うのだが、妙なものである。

彼が『現代詩手帖』で時評を担当していたとき、一度私の『言語ゲームと社会理論』をとりあげてくれて、現代詩の自己定義を掲げたことがあった（86年1月号、2月号）。彼の定式によれば、現代詩とは『日常言語の規範に従わないことを規範とする言語ゲーム』なのである。なるほどと思ったが、その通りだとすると、たちまち疑問も湧いてくる。それだと、もっとも過激で本質的な現代詩は、日常言語の規範がもたらす了解を完全に拒絶してまったく理解不可能なものとなるのではないか。逆に言えば、現代詩が詩の範囲に踏みとどまるためには、結局日常言語の規範に依存するほかにないではないか。それならそもそも、現代詩は何のためにあるのか。

彼はおそらく、日常言語はその規範によって必ず病んでおり、それゆえ現代詩という逆説を必要とするのだよ、などと逆襲してくるだろう。その先は、彼に聞くしかない。

*

旧い友人とは奇妙なもので、ごく平凡なことがらの積み重ねとしてしか彼のことを思い出せないのに、その延長上に、世間に向けた別の巨大な貌がいつの間にか出来上がっていたりする。

瀬尾育生。彼は何者か？ おそらく本人にも、それはわからないに違いない。だから、私のこの文章が成立する。私の幸運は、別の誰かに「詩人論」などといった文章を書かれる心配がないことである。